

インドの象祭とクルマ社会

Elephant Festival & Mortarization
in India

Fusako SUGITA

Travel Writer

杉田房子

旅行作家

インドの象祭に招かれた。所によって多少違うが、2月末頃から暑くなるインドでは、1月は各地で色々な祭祀がある。アラビア海に沿う南部のケララ州の町トリサールで催される象祭は、集められるのが近在の寺院で飼われる“聖象”101頭。それもタアスカと呼ばれる牙の大きいのに限り、しかも肩までの高さ3.3mのを揃え、盛装させて行進する粒選りの象パレードで名高い。

このあたりは中世の頃すでにヨーロッパに広く知られ、トリサールの南70kmの港町コチンなどは、1500年代にポルトガル人トメ・ピレスの書いた『東方諸国記』やオランダ人リンスホーテンの『東方案内記』に、地図や絵入りで再三登場している。当時はもちろん現在でもコショウ、カードモンなどの香辛料から米、ココヤシにいたる産物の集積・交易の中心で、象祭はこうした土地の豊かさと伝統とを“聖象”に凝集し、一年で最も快適な時期を祝い楽しむのが由来とされている。

それだけに、祭日のコチン〜トリサール田園道路はもちろん、トリサールの町なかの混雑はひどい。人口8億のインドはどこでも人が溢れるが、ここではそこに荷物運びの象が加わり、車の列にはバイクや自転車群が混る。車は後部にハッキリと「サウンド・ホーン（警笛を鳴らせ）」と書くのが規則なので警笛競争しながらとなるが、ウインカーなど壊れたままのボンコツが多く、窓から突き出した手信号で動きあうものだから、警笛は怒鳴り声つき。そこにバイクの騒音、人の話……。道路はおろか町全体が、混雑と騒音でワーンと共鳴している。

とはいえ、象祭の主会場にあてられたスタジアム内が比較的静かだったのはさすが。サッカーやクリケットなどにも使われる広いスタジアムが人で一杯だったのはもちろんだが、横一列にキチッと整列した101頭の“聖象”は、本当に威風堂々。金糸銀糸を織りなした色鮮やかな布や宝石を散りばめたアクセサリーの装いも眩しく、しかも一頭につき10人近い“従者”にかしずかれているところは、人のおしゃべりも封じる圧倒的な迫力がある。

まさにどっしりした風格のさせることなのだが、招待客ということでハイライトのパレードで乗せられた象の背は、乗り心地としては全然どっしりとしなない。座席が鞍がわりの布団一枚なのは、背の広さを物語って感服するが、歩きだすと滑り落ちそうな不安感がある。両脚で締めつけようにも背は広いのだし、結局は首の上に坐った象使いの上衣につかまったへっぴり腰の道中。象は眺めているもので、乗るものではなさそうである。

ところが、象使いは自動車よりはるかに優るといふ。第一に大荷物も運べる。第二に悪い道路も関係なし。第三に70年位使え、次の象まで自分で作る。第四に車なら払わなければならない税金もない。一日の食料300kgは大変だが、この豊かな土地柄ではガソリン代より安上りなのだそう。

実際、インドの道路はようやく舗装率40%台に乗ったばかり。ボンコツ揃いなので暴走事故も少なくなく、現に象祭に集合途中の象が衝突され負傷、象使いは死亡という記事が翌日の新聞にあった。過去10年間に車は1.64倍、バイクはなんと6.53倍も増えているのに、道路はわずか1.15倍と数字をあげた記事は、“聖象”もおちおちできないクルマ社会、といささか詠嘆的に結んでいた。

原稿受理 1992年3月2日